釧新郷土芸術賞に輝く

受賞者の横顔

□2□

書道

かな文字の優雅さ探求

「日展3度目の入選が目標」

橋本 智水さん

釧路市鶴ケ岱一の二の六

「文字の流れを大事にしたい」と橋本さん

高校教諭、後進の育成にも励む

本名・橋本好史(こうし)。雅号・智水(ちすい)とは、仏の深い真理をいい「仏の智慧(ちえ)に助けられて、文字を書かせてもらおう、との意」(橋本さん)と。かな文字の美しさに魅入られ、この書の探求につとめる。以来、十五年あまり。「優雅にして幽幻…」(同)かな書への思い入れは尽きるところを知らない。

釧路生まれ。駒沢大学(国文学専攻)卒。民間企業勤務を経て、五十一年から釧路緑ケ岡高校の国語教諭として教職の道を歩む。一方では、同校書道部の顧問として後進の育成に励む。

地元の高校・大学の書道指導者らで作る「久墨会」(米川荷薫代表)の一員。仲間らの書に触発され、新たな意欲を駆り立てる。

かな書三大社中の一つ寒玉書道会(本部・大阪、宮本竹逢主宰)に所属し、二年前に常任総務へと昇進し、審査にも携わる。

札幌・釧路で個展、大きな反響

六十二年の日展に初入選。平成元年には同展入選に加え、読売書展秀逸。翌平成二年には読売書展特選、今年も秀逸の成績をおさめ、同展評議員に選任される。作品はいずれも二尺・六尺の大きさ。

「書は心からはいる」という。テンションがグッと高まったところで、筆を運ぶ。かな書は流麗さで決まる。墨の色は実に淡く、書というよりは一つの模様に近い。

八月に初めて個展を持った。札幌・釧路の画廊を使い、三十点を展示した。大変な反響だった。

「書の知らない人にでも、かな文字の持つ美しさ、奥深さが少しでも伝われば、と思い画廊側の薦めもあり、開いてみた」とどこまでも謙虚。

なぜに、かな文字にこだわるのか。理由は「漢字をもとに日本人が生み出した日本独特の文字だから」と至って簡潔。「漢字とは違い、肩に力がはいることもない」と。

家族の名前もかなづくし

妻・はるみさん(四三)、長女みぎわさん(一〇)=小学四年=、次女・さといちゃん(六つ)=と名前までかなづくし。はるみさんは琴の教授で、二十弦琴の弾き手として知られる。また、みぎわさんは七月に開催された琴の全国コンクールで、最高賞に輝いた。

絵画などと違って書といえばどうしても地味なものに映る。刺激の強いものが求められる現代社会ではなおさらのこと。いかにして相手の心をとらえられるような作品を手掛けるか、との点で腐心する。

郷土芸術賞の受賞に「面はゆいばかり。すべて町田康雄校長をはじめ職場の仲間らに支えられてのもの」と。次ぎなる目標は日展で三度目の入選を果たすこと、と心新たにしている。四十三歳。